
半竜娘は異界の空に

名知 あやめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

半竜娘は異界の空に

【Nコード】

N2249W

【作者名】

名知 あやめ

【あらすじ】

「私」は病気で死んだ、と思ったら、気がついたら狭くて暗い中に押し込まれていた。え、これ卵？ 私竜…じゃなくて、半竜ですか。

健康な体にそこそこ満足しつつ、優しい父（竜）とカッコいい兄（竜）と暮らしていた私。でも外にも行きたい！ 人間も見てみたい！ と思っていたら…ある日、住んでいる場所の近くに傷だらけの人がやってきました。

現在更新停止中 詳しくは9月25日の活動報告をご覧ください

45°

プロローグ 死んだ少女と半竜娘

「私」は体が弱かった、というかはつきり言ってしまえば、生まれつき心臓に病気を抱えていて、心臓移植をしなければ成人まで生きられないと言われていた。

常々倦怠感と息苦しさに付きまとわれ、病院の白い壁と人工呼吸器がお友達で、学校へ行った記憶はほとんどない。少し体調のいいときは本ばかり読んでいた。

結局、「私」に奇跡は起こらなかった。提供者は^{ドナー}見つからず、「私」は17歳で命を落とした。

どうか、輪廻転生というものがあるのなら、次は健康な体で生まれるたい。色々なものを見て、聞いて、知って、できるならいるんな場所に行ってみたい。

そう願って……「私」の壊れかけの心臓は、永遠にその動きを止めた。

最後に、どこから声が聞こえたような気がした。

* * *

狭い。手足をぎゅっと縮こまらせた状態で、どこか暗くて狭い場所に押し込まれている。

(何これ!? 狭いって!)

じたばたと手足を動かしていると、みしつと音がした。どうやら私を閉じ込めている謎の物体のようだ。頑張れば壊せる気がする!

一生懸命中でもがく。みしみしという音が段々と大きくなってきて…割れた。

(出れた!)

暗い中から出てきたせいか、目が良く見えない。何度か目を瞬いていると、何となく目の前に大きなものが見えた。感覚も少しずつはつきりしてくる…と、突然の浮遊感。

「あなた、生まれましたわ。見てください、かわいい女の子です

「よ

…?

「うむ、そなたによく似ておるな」

何だか、上から声がした。無駄に威厳溢れる声がしたような……
そつと上を見上げる、と……

これはあれですか。よくファンタジー小説に出てくるあの超有名な。端的に言うくと、でっかいトカゲに角と羽をくつつけたような生き物。これって、あれ

(竜……!!!!?)

「うにゃあああぁ!」

叫んだはずが、口から漏れたのは全力の泣き声。
「あらあら、どうしたの?」

えっと、ちょっと待って。私、赤ん坊!?

プロローグ 死んだ少女と半竜娘（後書き）

改めまして、はじめまして。初投稿になります。

文章能力は未熟な限りですので、批評などいただけるととても嬉しいです。

1 神竜の谷の半竜娘（前書き）

今回から、『』を竜語と精霊語、「」を人間語と表記します。

1 神竜の谷の半竜娘

あの混乱を極めた誕生の瞬間から早五十年経ってしまった。結局、あの謎の物体は卵だった。

どうやら私は、いわゆる転生というものをしたらしい。しかも、前の人生の記憶を持って。あまり多くはない前の人生での用語で言えば、「異世界転生型トリップ」とでも分類されるのだろうか？ なんだか結構ありがちなジャンルだったという覚えがあるのだが。

とはいえ、現在の私がある存在かといえば、そうとは思えない。

まず、現在の私の家族構成。母様は三十年くらい前に亡くなった。金の髪と濃青の瞳の、非常に美しい女性だった。現在は父と暮らしているのだが：生まれた時目の前にいた竜が父でした。銀の鱗に金色の角の、スマートな美人：じゃなくて美竜だ。理解したときは真面目にどうしようかと悩んだよ、私二歳で外見まだほとんど赤ん坊だったけど。

あと、兄がいる。兄様は母親も竜。父様を少し小さくしたようなくらいの、銀の鱗と角の竜で、カッコいい自慢の兄様です。

つまりは、私は半分竜、半分人間。残念ながら竜の姿じゃない、というか、なりたかかったけどなれなかった。現在の私の姿は、父様たちと同じ銀色の髪と、母様ゆずりの濃青の瞳の、見た目人間の女の子です。外見は、大体十五歳くらいかな？ ただ、目の色が濃くて目立たないけど瞳孔が縦に割れた竜の瞳だったり、出し入れ自在の竜の翼があるけど。

最初こそ戸惑ったものだが、健康な体に私は満足している。元々外をほとんど知らなかったせいかな、この世界にもすんなり順応できた、と思う。

実のところ、まだ私は母様以外の人間にあつたことはない。現在暮らしているのは「神竜の谷」と呼ばれている、竜がたくさん住んでいる場所の奥の方。ここは近くの国の人間たちには聖地とあがめられているから、普段はめつたに人は近づいてこないし、来ても入り口だけだ、と、魔法を覚えてくれた黒竜のおじい様が言っていた。時々遊びに来てくれる精霊の皆が言うには、「弱いくせに狡賢い偉そうな奴ら」らしい。人間の使う魔法は、精霊に強引に言うことを聞かせるというものだからだと思う。

魔法というのは四つあつて、人間が使う『魔術』、竜が使う『竜語魔法』、精霊や、精霊と会話ができるものが使う『精霊魔法』、あと一つはまだ教わっていないけど、あまりいいものではないらしい。魔術は「お前ら俺の言うことを聞け」、竜語魔法は「自力で何とかする」、精霊魔法は「お願い力を貸して」という感じ、かな？ うまく説明できないけど。

私はこれでも一応竜語魔法と精霊魔法が使える。竜的には五十歳で両方使えるの珍しいそうだが、半竜的にはどうなんだろう。現在半竜って私しかいないらしいから、よく判らない。

さて、いろいろ考えているうちに、神竜の谷の入り口まで来ていた。最近の私の日課は、谷の入り口にある大きな岩の塔の上から、外の世界を眺めることだ。

竜の目は遠くまでよく見えるが、流石にここから人間の町は見えない。背に翼を生やし飛び立つと、喉の奥で「くるる」と小さな鳴き声を立てる。竜語魔法の視力増強の術：といつても、ほぼ私しか使わない術だ。私以外皆「飛んで見に行けばいい」という考えの竜たちばかりだからね。

切り立った岩の塔の、ほとんど崖みたいな端に腰を下ろして、今日も外を見つめる。今日はどこまで見えるだろうか。いつか自分で

外に行きたいものだけど、百歳になるまでは外に出てはいけないということになっているのだ。

「おや？ 竜影発見。誰か帰ってきてるな…あれは…」

「またそこか、リステイアージエ」

「あ、エル兄様おかえりなさい」

瞬く間に谷に近づいてきた竜は、私の兄エルディアスだった。ちなみにリステイアージエが私の名前である。

「お前も飽きないな」

「百まででは出れないけど、見るくらいならいいでしょ？ 私も早く外へ行ってみたいなあ」

「あと五十年だろう」

エル兄様は苦笑して岩の塔に着地し、長い首で背を示した。

「ほら、乗れ。帰るぞ」

「私も飛べるけど…」

「そう言っただけだ。それに遅いし」

「図星を指されてうなだれる。兄様の速度についていこうとしてバランスを崩して落ちたのはいつのことだったか。竜になれない私は、翼があっても速くは飛べないのだ。」

諦めて兄様の背の上に飛んで上がると、兄様はふわりと離陸した。

「落ちるなよ」

「頑張る」

兄様の首元にしっかりとつかまって、私たちは住処を目指した。

1 神竜の谷の半竜娘（後書き）

読んで頂きありがとうございました。

わかりにくいところ、表記のおかしいところなどありましたら、
教えて頂けるとありがたいです。

2 はじめての人間と半竜娘（前書き）

2話目にして1000近いPV！ 皆様本当にありがとうございます。
ます。

ストックが尽きるまでは、1〜2日に1話ずつ投稿していく予定です。

2 はじめての人間と半竜娘

今日も今日とて谷の入り口を目指す。私は飛んでいくより歩いていくほうがいいので、いつも奥の住処からてくてくと歩く。以前はほとんどベッドの上だったからか、足の裏に感じる地面の感触が好きなのだ。

その途中で黒竜のおじい様のところへ寄る。この方は神竜の谷の長老の一体で、私に魔法を教えてくださいました竜。血のつながりはないけれど、私を孫のように可愛がってくれるのだ。本当は「長老様」と呼ばなければならぬだろうけれど、私は彼をおじい様と呼んでいて、おじい様もそれを許してくれた。

「おじい様ー、こんにちはー」

おじい様の住んでいる洞窟の入り口で、私は言った。この洞窟は広いので、ちよつと大きな声を出さないといけない。

「おお、リステイアージエ、よう来たな。入っておいで」

「はい、失礼します」

奥から若干しわがれた声が聞こえて、私は洞窟に足を踏み入れる。中は暗いけれど、竜の目にそれはたいした障害にはならない。それに、ここはいわゆる「勝手知ったる他人の家」という奴だ。

「ふむ、今日はどこからじゃったかな？」

「ええと、竜語と精霊語の魔力に対する作用の違い、あたりからです」

「おお、そうじゃそうじゃ。では始めるとしようかの」

というわけで、これから昼の時間まで、ここでおじい様に魔法を教えてもらうのも日課だ。これがかなり面白い。流石、おじい様は物知りだ！

魔法の勉強を終えて、今日も岩の塔の上。今日は珍しく父様と一緒だ。

父様は、名をアルフェンストラウドという。それほど年を取っているわけではないが、光の精霊に愛され、光の魔法を使わせたら谷でも父様に敵う竜はいない。私にとっては、優しい自慢の父様というのが第一だけだね。ただ、いつも外の世界へ行っていて、なかなか谷には帰ってこないのが少し寂しい。

「…それで、おじい様に教わって、精霊の皆と花を咲かせたの！今年我真っ白の花で、とっても綺麗だったんだよ」

毎年恒例となっているそれは、母様のお墓の周りに花を咲かせること。この辺りは、若干日本人の風習が残っているせいかな？ お墓参りなんて、前は一回行った記憶があるくらいしかないけれども。

「そうか。…リステイアーヂェ」
「？」

「エルディアスに聞いた。外へ出たいか？」

私は首をかしげた。確かに外へは出たい。が、百歳になれば自由に出られるはずなのだ。半竜の寿命はよく判らないけれど、現在私は五十歳、外見十五歳くらいということを見ると、単純計算しても三百年くらいは生きれそうな感じがする。二百年あれば、それなりに満足いくまで外へ行けるんじゃないのかな？

「出たいけど、百歳になってからだよね？ それまでは魔法を練習しようと思ってるの。私には爪も牙もないけど、自分で自分を守るようになりたいしね」

幸い、魔法に関してはそれなりに才能があると言われている。きっとそれくらいはできるようになるだろうし、できるようにならないと、と思って練習中だ。

『黒の長老から聞いている。精霊たちとも仲がいい。あるいは、我

ら以上の魔法の使い手となるやもしれん、と言っていたぞ」

「ええ！？」

父様の声は冗談には聞こえなかった。本当だったらお世辞でも嬉しい、けど…恥ずかしいですおじい様。

顔を赤く染めた私をなだめるように、父様のしつぽが頬をくすぐる。ひんやりした鱗に頬を寄せて、私は呟いた。

「皆、使えるのに使わない魔法多いんだもの…失われた魔法も多くて、もったいない」

「今使ってるのは、それは何だ？」

「今は…外を見るのに視力強化使ってるだけ。結構遠くまで見えるようになるよ、ええと…」

どこまで見えるか伝えようと、私は外を見た。目を凝らして、なるべく遠くまで見ようとして…

「あれ…父様、あれ！」

私は慌てて立ち上がって、外をまっすぐ指差した。強化された視界の中、点々と見えた赤い色。それを追えば、谷から少し離れたところに、何かがある。

人の形だ。金色の髪に、赤い色がまだらについていて、背中もべつたり赤くて…

「人みたいな形してる、怪我してる！」

父様は、既に首をもたげてそれを視界に捉えていた。

「何者だ…すまない、少し行ってくる」

体を浮かそうとする父様を、私は慌てて呼び止めた。

「まって父様、私も行く！」

「リステイアージェ…しかし」

言葉を遮って、私は言った。

「父様、治療の魔法、使える？」

竜の皆が使えるのに使わず、忘れ去った魔法の中に、治療魔法もある。竜は総じて魔法で傷つくことはなく、竜の鱗を貫けるような攻撃なんてほぼ皆無。もし万が一傷ついてても、回復力が強いいため、

放っておいても魔法並みの速さで治る。そのため、わざわざ治療に魔法を使うことがなくなったのだという。

案の定、父も治療魔法を知らなかったらしい。しばらく考えた後、私に背を示した。

『乗りなさい』

父様の背に飛び乗るや否や、父様の体が宙に浮く。ほとんど時間を置かずして、私たちはそこにたどり着いた。

『これは…』

男の人、だと思う。うつぶせに倒れているから、多分、だけど。うつすらと覚えている記憶から言葉を借りるなら、「ファンタジー小説に出てくる騎士みたいな格好」と言えばいいかな？ 金属の鎧を着ているけれども、その背中部分が見事に砕けて、真っ赤に染まっていた。

流石に、ちょっと怖い。前の「私」の病気は特に血を見るものはなかったし、竜の皆は怪我をしない。せいぜい自分が転んだり、落ちたりした傷くらいしか見たことはないから…でも。

『治す、ね…』

きつと私は今真っ白な顔をしているだろうけど、私が治さないと…死んでしまう。怖くても、頑張る。そのために父様に無理を言っ

てついてきたんだから…。意を決して、傷口の上に手をかざした。

「るる…るう…くる…」と、喉を震わせて魔法を紡ぐ。傷をふさぐものと、本来あるべきではないものを消す魔法。鎧の破片とか、感染症とか、怖いし。いつもは自分の怪我にしか使っていないくて、こんな大怪我を治すのは初めてだけど…多分これで大丈夫だと思う。かざした手から、青白い光がはららと落ちて、傷口に染み込んでいく。やがて光が全て傷口に染み込んだ。一旦出た血は戻らないから、見た目は相変わらず真っ赤だけれど。

『これで大丈夫、だと思っ』

思っていたよりはつきりとした声が出た。父様を見上げて、首を傾げる。

『治したのはいいけど、この人間どうしよう?』

父様は、少し悩んでいるようだった。まあ、私たちの住処には連れて行けないし、なら何処に持って行けばいいのかなんてわからない。放置かな? ここはあまり居心地よくなさそうだけど。

『うむ…少々距離はあるが、人の住む場所まで運べばよいか』

『なら、私は先に帰ってるよ。外にいたなんて、知られたら大変だ』
神竜の谷の方角はあつちだから…私が飛んでも、そう長くはかからない距離で、ちょっと安心した。できれば誰にも見つからないように帰りたいところだ。

と。視界の端で、何か動いた。

「う…う…」

ひ、人っ! さっき治した人、動いてるよっ!!

『と、父様父様! 起きたかも、どうしよう!?』

お前一応人間だろう、といわないで欲しい。私の意識としては、自分の種族は竜に近いと思ってるし、そもそも母様以外の人間は始めて見たんだから。

思いつきり慌てふためく私の前で、彼はゆっくりと身を起こしていった。

2 はじめての人間と半竜娘（後書き）

感想、批評、誤字脱字やおかしな文章の指摘など、心よりお待ちしております。

なるべく文章内で全ての説明をしようとしていますが、後々あとがきに若干説明が入るかもしれません。

3 守護竜な父と半竜娘（前書き）

すごい勢いで増えるPV、そしてお気に入りに入れてくださった方、本当にありがとうございます！

3 守護竜な父と半竜娘

「ここ、は…」

ゆっくりと頭を振り、彼は辺りをきよきよと見回す。多分未だに慌ててる私と、父様が見えたんじゃないかな…って、いいんだろつか父様。人間が竜を見たときの一般的な対応ってどうなるんだろっ？

『ええと、起きちゃったけど、どうしたら…』

「守護竜様！」

思わず父様に相談する私を遮って、彼が声を上げた。って、あれ？ ちょっと待って、今彼なんて言いました？

「お探しいたしました、守護竜様！ どうか、どうか一刻も早くラステイダーにご帰還ください！」

『えーと…父様？』

「シュゴリユウ」とは何なんだ一体。父様をじっと見上げていると、何となく嫌そうに目を歪めながら、父様は彼に話しかけた。

「静まれ。我は約定に従い我が里へと帰還したまで。何ゆえに約定を違えてまで我を求めるか？」

おお、人間の言葉だ。懐かしいなあ、母様が亡くなって以来話してないし聞いてないよ。しかし、内容は聞き取れるんだけど、意味がわからないです父様。

「無礼であることは重々承知しております。しかしながら、どうか…！ 守護竜様が御発ちになられて以来、魔獣共が勢いを増し、最近では魔族どもの出現も確認されております。このままではわが国は…ッ」

うーむ…「マジユウ」に「マゾク」ねえ。なんか前にそれっぽい言葉を見たことある気がする。ファンタジー系の言葉で。よくはわからないけど、父様はこの人間と知り合いで、人間は父様を探して

いたということか。もしかして、父様があまり帰ってこれないのってこのせいなのかな？

しかし、私は一体どうしたらいいんだろう、この状況は。

『父様：？』

「ああ、すまない。人の子よ、しばし待て」

「守護竜様！？ そちらの娘が、何か」

あう！ あの人のこつち睨んでるよ。目線の高さからして私睨まれてるよ！ 結構綺麗な顔してるだけに怖いよ！！

『と、父様：』

『すまない、先に帰ろう。長老たちには私から言っておいてやるから、外に出たことに関して何か言われはしないだろう』

いえそれよりもあの人の視線が怖いです、刺さってます。かなり精神的に痛いです！ と、目を潤ませていたら、父様も彼の視線に気付いたみたいだ。さりげなく私を翼で隠してくれながら、不機嫌な声で言う。

「我が娘に何用か」

「娘！？ え、いや、なんで人間：」

失礼な！ ああ、でも、翼出してないと私はほとんど人間にしか見えないから仕方がないのかな。何にしろ、このままじゃ時間がかかりそうだ。はやく谷に帰りたいのに…。手っ取り早く自己紹介しましょうか。ついでにもう私を人間だなんて言わないようにしてもらわないとね！

私は父様の翼の影から出て、彼の前で翼を広げて見せた。

「！？」

おお、目が丸い。

「私、は、銀竜アルフェンストラウドの娘、リステイアージエ：一応、竜でス」

うわ：人間の言葉忘れてる。これは時々話す練習しないとつか話せなくなりそうだ。よし、谷に帰ったら毎日少しずつ人間の言葉を話す時間も作ろう！ 忘れるなんてもったいない！

『リステイアーゼエ!』

『あ…名乗っちゃダメだった? 忘却の魔法とか使ったほうがいい?』

そういえば、竜は名前を大事にするから、だめだったかも。でも谷の皆は結構気軽に名前教えてくれるんだけどなあ…おかげですっかり忘れていたよ。あ、でも愛称はダメ。あれは家族とか特別な相手じゃないと呼ばないし呼ばせない。私も愛称で呼ぶのはエル兄様だけだもの。

『いや…まあいい』

なんか悪いことしちゃったのかなあ?

「な、ならばその、そちらの…娘様を心配しておられるならば、どうか共に…」

『はい?』

『恐らく言い出すとは思っていたが…やはりか』

そろそろ私訳がわからなくなってきたよ。誰でもいいから説明し欲しい、かなり切実に。そしてはやく帰りたい。いくら父様が言い訳してくれるといっても、外に出ている状況で見つかったら非常に困る…この辺り竜の通り道なんだよね。

『そこで何をしておるか』

! 案の定見つかったよ!

上を見ると、鮮やかな青い鱗を煌かせた竜が1匹舞い降りてくる。あれは…

『青の長老。貴方こそ何故このようなところに』

父様も気付いて呼びかける。やっぱりあの綺麗な青色は、青の長老セヴィルローディオ様だったか。

『東に少しな。お前はとうした、アルフェンストラウド。そして何故リステイアーゼエがここにおる?』

やっぱり見逃してはもらえなかったか。この方は規則とか掟とかに詳しい、厳しい方だからな…私どうしよう…。

びくびくしながら父様に視線をやると、父様は青の長老様を見て

話し始めた。

『そこな人の子が、谷から見えたので。ラストイダの者であったようなので捨て置くこともできず。掟は重々承知しておりますが、谷で治療魔法を使えるのはリステイアージェのみ。此度のみはお許しを』

長老様はそこで初めて人間の存在に気がついたようだ。しばし考え込むと、重々しい声で告げた。

『…そなたの役目から考えれば、それは仕方なきこと、であるな。此度のみは許そう。帰るぞ』

こ…怖かった…。やっぱり百歳まで外は出ないほうがいいね、うん。

長老様が浮き上がると同時に私も翼を出す、父様は何故か動く心配がない。

『父様？ 帰りましょう』

『ああ…いや、すぐに追いつく。先に帰っていてくれ』

『…？ うん、先に行くね』

翼を飛ばたかせて谷へ向かう。相変わらずのゆっくり飛行をしながら見れば、父様はあの人間と話している様子。

結局彼は一体何だったんだろう？ 意味のわからないことばかり増えてしまったけど、後で父様に聞いたら教えてくれるかな？

ようやく見えてきたいつもの岩の塔を目指して飛びながら、私は父様とさっきの人間に思いを馳せた。

3 守護竜な父と半竜娘（後書き）

誤字脱字報告・批評・感想等、お待ちしております。

早くも第一回難産回だったので、少し文章が乱れていますが、ご了承ください。

4 ある朝の半竜娘（前書き）

気付いたらお気に入り百件突破、PV一万を記録しておりました。
本当にありがとうございます！

4 ある朝の半竜娘

夜になって、ようやく父様が帰ってきた。もう眠い時間だったけれども、私は寢床にしているふかふかの草の山の中から顔を出し、精霊に頼んで洞窟の中に明かりをとまず。暗いままだとそのまま寝てしまおうだ。

『父様、おかえりなさいー』

眠気で間延びする声は仕方ないと思って欲しい。普段なら日が沈んで少し経つたらもう寝てしまおうのだ。普通の竜は数日寝なくても平気だが、何分私は成長期。よく寝るしそれなりに物も食べる。ちなみに私の主食は果物だ。

『ただいま。寝ていてもよかつたんだぞ？』

『んー…大丈夫ー』

もぞもぞと寢床から抜け出そうとするが、その前に父様がこつちに来てくれた。長い首を差し出して頬擦りしてくれる。

『ほら。いろいろと聞きたいことはあるだろうが、明日にしよう』

『んー…父様、明日もいてくれるの？』

『ああ。明日、大事な話があるから。だから今日はもう寝なさい』

『ん…お休み父様…』

大事な話、というのが気になったけど、眠気に耐え切れず寢床の中に埋もれる。その周りを父様が包むようにしてくれた。いつだつて、父様と母様の傍が私の一番安心できる場所。

私はその日、夢も見ずに眠った。

* * *

寝起きの悪い私にしては珍しく、今日はすっきりと起きることが

出来た。父様の姿は見えなかつたけど、父様が「いる」と言った以上近くにいます。寝床から起きだして、背伸びを一つ。とりあえず朝の水浴びと朝ごはんにしよう。私は翼を出して洞窟の外へ出た。

水浴びを終えて、いくつか果物を取って食べながら住処へと帰る。今日は私の好きな木の実が熟れていてちよつと嬉しい。色が黄色で形が枇杷びわっぽいこの果物だが、食感と味は林檎だつたりする。最初は凄く違和感があつたが、最近はむしろこつちが普通だと思えてきた。

『ただいまー』

そして丁度完食。ご馳走様でした。

『おかえり』

『あ、父様帰つてたんだ。お帰りなさい』

翼をしまつて住処の中へ。さて、昨日のことを聞けるかな？

『父様父様、昨日のこと聞いてもいい？』

『ああ…そつだな。先に説明しておいたほうがいいだろう』

先に？ なんだか少し引つかかつて、私は首をかしげる。

『後で、長老方の所に呼ばれているんだ。リステイアージエもな』

『…もしかして、昨日のこと？』

若干引き気味に言つた私に、父様は笑つて言つた。

『あれは関係ない。青の長老も不問だと言つていただろう？』

『じゃ、何だろう？』

『まあ、悪いことではないよ。さて、それで何を聞きたいのかな？』

悪いことじゃないならいい…のかな？ 今のところそれは置いて

おくとしよう。行けばわかるだろうし。とりあえず一番聞きたいの

は…

『んと、「シユゴリュウ」って何？』

『守護竜というのはね…』

説明が結構長かったので、私なりに纏めてみた。「マゾク」とか「マジユウ」というのの説明も混ざってたから、まあ仕方ないかな。今から五十年とちょっと前、私の母様セリセラは、ラストイーダという国で巫女というものをやっていたらしい。巫女というのお仕事は、国に結界というものを張って、魔獣というものの侵入を防ぐことだったんだって。父様と結婚した後も、母様は巫女の仕事を続けていたらしいんだけど、その時に父様が母様を手伝っていたら、いつの間にか国を守る竜、守護竜と呼ばれるようになったとか。

魔獣とか魔族というのは、「狂った精霊」というものを操る…らしんだけど、狂った精霊って何だろう？ その辺りは専門家に聞いたほうがいいと言われたので、とりあえずいつか専門家を見つけて聞いてみようと思う。動物っぽい形のが魔獣で、人型してるのが魔族。私のまだ習ってなかった「四つ目の魔法」を使うらしい。

ふう、長かった。

『さて、行こうか』

父様に促され、私も立ち上がる。ちよつと緊張してきた…長老様は、おじい様以外にはあまり会わないからなあ…。

そう遠い場所ではないので、頑張つて自力で飛んでいくことにした。ゆっくり飛ばせてごめんね父様！ 何かあるのかはよくわからないけど、とりあえず行ってきます。

4 ある朝の半竜娘（後書き）

難産回その1、の続きです。

もしかしたら前話共々後で手直するかもしれませんが。

誤字脱字等ございましたら、ぜひともご報告よろしくお願いいたします。

5 旅立ちの半竜娘（前書き）

9 / 1 タグを増やしました。

9 / 2 誤字修正、一部文章を改訂しました。

5 旅立ちの半竜娘

谷の中でも比較的奥まった場所にある、開けた場所。集会などに使っているそこに行くのは、私は初めてだった。五十歳は竜としてはまだ子供も子供、親と一緒にいるのが当たり前な年齢だから、大人の集会場とかに行くほうが変だと思う。

柔らかい緑の草の上にとん、と着地すると、そこには既に長老様たちが集まっていた。うう、緊張する…。と、びくびくしていたのが伝わったのか、長老様のうちの一体がくすくす笑い出す。

『大丈夫よりステイアージエ。別に食べやしないわ』

言ったのは赤の長老様だ。長老というには若い、雌の赤竜は、私にとつては優しい近所のおばさんだったりするのだが、長老様六体勢ぞろいの前で言われましても…。

『いやいや赤の、普通はこうなるだろう』

フォローありがとうございます緑の長老様。しかし本当に何で私は呼ばれたのかな？

『あの、長老様方…私は何故呼ばれたのでしょうか…？』

かなり緊張したがここにずっといるのも耐えられそうにないため私から話を切り出す。長老様方は話をやめて各々顔を見合わせるとおじい様 - - いや、ここでは黒の長老様と呼ぼう - - が口を開いた。『うむ。ではわしから言うのでしょうか。リステイアージエよ、おぬし、外へ行ってみぬか？』

『はい？』

思わず聞き返してしまった。掟どこ行っちゃったんだ？

『疑問に思うも無理ないがの、考えあつてのことじゃ』

黒の長老の言を青の長老が次ぐ。

『本来百年の掟は、百年の間は親と共に在り、竜として生きる術を学ぶためのもの。故にそなたのように、親がそもそも谷にいないようでは意味がなかるうということになつてな』

次いで、緑の長老様。

『リステイアーヂェは魔法を良く修めている。外へ出たとて身を守ることに問題はなかるう』

『ええと…』

『実はもう一つあってね』

赤の長老様がちょっと困ったように言う。

『半竜って、竜ほど長生きできないみたいなのよね。例自体が少ないらしいけど、青の長老が調べてくれたわ』

『とはいえ、個体差が激しいようだから一概には言えぬ。が、人間より少し長い程度の中で寿命を迎えたものもおるといふ』

人間より少し長い程度…何歳くらいだったんだらう？ こっちの人間の寿命なんて知らないからどうもよくわからない。向こう基準で考えると…百歳くらいかな？ なんだか心配になってきた…。

『そういった事情も鑑みるに、アルフェンストラウドと共に暮らすという条件の下、外にて暮らすことを妥当とした次第だ』

なるほど、大体わかった。

『後はそなたの意思一つ。どうする？』

私は一旦目を閉じて、頭の中に言葉を搜した。答えはもう決まっていたから、後はそれを声にするだけ。それだけのはずなのに、妙に勇気が要るのは何故だろう。

『私は…外に行きたい。広い世界を見てみたい。けれど…』

目を開いて、長老様たちをしつかりと見つめる。

『爪も牙も持たぬ私ですが、この翼が帰るのはこの場所だけ…そう思っているんですか？』

ここは、私の大事な場所だから。ただいまと心から言える場所はここだけだから。長い旅に出る竜たちが故郷に残す言葉を変形して、私の言葉として送る。

『いつでも帰ってくればいい。銀の翼のリステイアーヂェは、我らの子なのだから』

これもまた、定型の言葉を変形させて、沈黙を保っていた白の長

老が送ってくれた。

* * *

行くと決めてしまえば、後は速いもの。元々荷物なんて皆無なんだから、荷造りの必要なんてない。明日朝出立する父様にくっついていだけ…のはずだったんだが。

『嬉しいけど…どうしよう?』

手のひらに山盛りになるほどの小さな鱗たちを前に、私は途方に暮れていた。

竜の風習で、無事を願う相手に鱗を一枚送る、というのがあったが、知り合いの皆に挨拶しに行くたびに一枚ずつ貰っていたら、なんだかすごい量になってしまった。一応皆小さめのくれたのだがそれでも結構なかさになっている。大体何かしらの形にして身に着けるものなんだけど…どうしよう?

『人間の町に行ってから細工してもらおうというのはどうだ? 人間はそういうのが得意だぞ』

『なるほど、そうしようかな』

見かねた父様が忠告してくれる。流石に一枚二枚くらいならともかく、この量だと自分で何とかするのはちょっと無理そうなので、そうすることにした。

眠れなくなる、なんてことはなく次の日の朝。

晴れ渡った空の朝日を浴びて、私は父様の背の上から皆に手を振る。

『行ってきますー!』

気をつけてー、とか、いつでも帰ってこいよー、という声を聞き

ながら、徐々に遠ざかっていく谷を見てみると、一体の竜が高速でこちらに近づいてきた。

『レン兄様！』

『間に合った！ほら、持っていけ』

上から落ちてきたきらきらと輝くものを受け止める。

『短剣？』

それは、美しい細工の施されたダガーだった。鞘から僅かに抜いてみると、金属にはありえない薄く透き通る刃が覗く。

『知り合いに頼んで作ってもらった。お前の爪代わりにはなるだろう？』

うん、凄く綺麗で…多分これ、材料は兄様の鱗だと思う。この銀の輝きは見覚えがある。綺麗で優しい色だ。ダガーを鞘に納め、掲げて見せた。

『ありがとう兄様！ 最高のお守りだよ！』

『馬鹿、お守りじゃなくて使うときには使え！ 自分の身は自分で守るんだろ？』

『あはは、そうだねー！ そうするよ』

一つ頷いて、兄様は旋回して高度を下げていく。私はダガーを腰に巻いた帯に挿した。

父様が徐々に速度を上げ始める。振り落とされないように首の付け根辺りにしっかりとつかまって、私は身を伏せた。

5 旅立ちの半竜娘（後書き）

なんと日間ランキング4位にランクインしました！ お気に入りしてくださった方、評価してくださった方、そして読んでくださった全ての方、本当にありがとうございます！

第一部本編はここまでとなります。次話は三人称視点となりますのでご注意ください。

誤字脱字、わかりにくい部分等ございましたら、是非ともご指摘よろしく願います。

幕間 親馬鹿たちの夕べ（前書き）

タイトルに反して、半分以上がシリアスで構成されています。
今回は三人称視点となりますので、ご注意ください。

幕間 親馬鹿たちの夕べ

谷の奥に位置する集会場。普段は広々とした場所であるはずのそこに、今は沢山の竜が詰め掛けている。

『限界が近いと?』

青の長老が重々しく口を開いた。それは普段とは打って変わったどこか沈痛な声色である。頷きを返すアルフェンストラウドもまた沈んだ声で、言葉を選ぶようにゆっくりと口を開く。

『元より、セリセラが予見していたことではありませんが…これほどに早く訪れるとは思っておりませんでした』

『魔獣どもの動きの活性化、魔族の出現…ラスティードに今だ次代の巫女は現れず、瘴気の流入も増えている。全くもって、忌々しいことだ』

ふと溜息をつく。認めたくはない事実ではあったが、認めざるを得ない。

『この谷は、リステイアージエが生きられる地ではなくなってきたおる、ということか』

重い沈黙が落ちた。

リステイアージエ誕生の折に、母たるセリセラが告げたこと。それは、リステイアージエが瘴気に弱い体質であるということだった。竜たちですら昔と感ずるほどの昔、魔獣が世に現れ始めた頃より出現した、精霊を狂わせ生あるものを蝕む『瘴気』。今では多かれ少なかれ生き物は瘴気に対する耐性を持っているはずなのだが、リステイアージエにはそれがほとんどないという。それは長命ゆえに次世代へ受け継ぐ力が弱い竜の血を色濃く引いているからなのか、歴代最強とも言われ、瘴気浄化能力を合わせ持つ結界巫女セリセラの子だからか、その理由は定かではない。唯一つ確かなことは、世界に瘴気が増え行く中で、リステイアージエが暮らせる地はそう多

くは残っていないということだけだ。

『住処にはセリセラの残した浄化結界が生きています。しかし、狭い住処にあの子を閉じ込めるのはあまりにも不憫でしょう』

『しかし、最近は住処で眠る時間も増えておるようじゃ。あの場に
いることが一番良いと本能でわかっておるのじやろう。住処の内に
籠らせるをいなとするならば、早急に策を立てねばならん』

『そのことについて、本日は皆に集まってもらった次第です』

アルフェンストラウドの声に、沈黙の中に緊張感が生まれる。

『ラストイード王国首都クリムウルトへ、リステイアージエを伴
つていこうと考えております。確かに危険な地ではありますが、巫
女不在の間ですら瘴気を寄せ付けぬあの町ならば、あの子も暮らせ
ましよう』

『あの町か…』

長老たちが唸る。周りで聞き耳を立てていた竜たちも、にわか
にざわつき始めた。

『確かにあの町なら…いやしかしあの町は魔獣との戦いの最前線。
世界最高峰の結界に包まれているとはいえ、少々危険すぎるのでは
ないか？』

『内に入ってしまったえば、あの町ほど安全な場所ありません。何よ
り常に瘴気を浄化し続ける機構の整った場です。何より…長老方。
正直に言ってしまうが、私も娘と暮らしたいんです』

長老たちは再びむう、と唸る。ざわめく周りの竜たちが、『私た
ちにとつても娘みたいなものなの…』とか『いつそクリムウオル
トをしゅうげ…じゃなくて住み着くか』とか言うのが聞こえてきて、
アルフェンストラウドは不機嫌そうに尻尾を揺らした。

そもそも長命であり子供がめつたに生まれない竜、子供は谷の全
員の子供という感覚で、皆で育てるものだ。半竜とはいえ、リステ
イアージエは母セリセラ共々谷の竜たちに受け入れられているため、
考えられない反応ではない。ないのだが…。

『静まれ！ リステイアージエのために思えばそれ以上に良き場はあるまいて！』

それとレイヴエン、襲撃などと馬鹿を申すでない。あの町が無くなれば、困るのは人のみではない。我らにとつてもあの町の存続は重要だと何度言えばわかる！？』

『わ、わかつてますよ！ 冗談です！』

『ならばよい』

最後に場を纏めるように、白の長老が言った。

『リステイアージエはクリムウォルトに。アルフェンストラウド、良くリステイアージエを導くように。ああ、それと…もしもあの子に何かがあれば、谷の竜全てを敵に回すと思え、と、人間に一字一句間違いなく伝えるように』

『はい、間違いなく』

結局全員親馬鹿であった。

リステイアージエが谷から旅立つ二日前の、そんな夕暮れ時であった。

幕間 親馬鹿たちの夕べ（後書き）

いつもとは違った視点からでしたが、いかがでしたでしょうか？
今後も、基本章の終わりに「幕間」と称して三人称視点を入れて
いこうかと思っております。

誤字脱字やわかりにくいところ等ございましたら、是非ご指摘お
願います。

6 王都の空の半竜娘（前書き）

ここから第二部となります。そろそろストックが尽きそうになってきました…。

6 王都の空の半竜娘

父様の背に乗って空を行く。この速度に目も慣れてきて、少しずつ回りを見渡す余裕も生まれてきた。日の傾きで大体の時間を計ってみる。どうやらそれなりに長時間飛んでいるようなのだが…父様でこれだけかかるとなると、私の翼では一日かけても谷までたどり着けないんじゃないかな？ 予想していたより大分遠かったようだ。纏わりついてくる雲を抜けて、広がる青い空の下、広がる光景に…私は息を飲んだ。

「何、あれ…」

眼下から東にかけて広がるのは、少々まばらながらも広がる木々。遠くに見える背の高い影は建物だろうか？ 町の方へと伸びる道も数本見える。そこから視線を転じて西を見ると…そこには、何もなかった。ただ黒一色の、どこか生物的な収縮を繰り返す霧もやのようなものに覆われている。黒い霧と木々の茂る場所との境には境界線のように、見える限りどこまでも続く高い壁と、そのところどころに建てられた物見塔。その中でも特に霧が活発に動いている場所の近くに、大きな町があった。

黒い霧に背を向けるように…あるいは黒い霧に相對するかのように建つ、砦と言った方が正しいであろう城。その反対側、黒い霧から一番離れた場所にも、大きな建物が一つ。城郭に囲われたその中は、遠目には普通の城下町のように見える。いわゆるファンタジー小説にありがちな、中世ヨーロッパに近い雰囲気を持つ町だ。しかし、その目前まで迫る得体に知れない黒い霧が…そして物々しい砦と壁が、その町を異質なものに変えていた。

ラストイーダ王国王都クリムウォルト。「最果ての戦士の都」、「世界の盾」、「王都にして最前線の町」。さまざまな呼び名をもつこの町こそが、これから私が暮らす場所だった。

父様が降り立ったのは、城の反対に位置する大きな建物、その奥にある天井のない広い空間だった。石造りのがらんとした空間はどこか寒々しく空虚で、私は父様の背から降りて問いかけた。

『ここはどこ？』

天井がないにも関わらず音響効果抜群のようだ。発した声は反響して天から降り注ぎ、柔らかな余韻を残すと緩やかに消えていく。

『神竜神殿と呼ばれている場所だよ』

父様の穏やかな声も、いつもよりもっと高い場所から降ってくるように聞こえた。

と、遠くから音が聞こえてきた。複数の、硬い音だ。この場にひとつだけある人間サイズの入り口の向こう側から、だんだんこちらに近づいてくる。思わず父様に寄り添う私を、なだめるように父様が顔を寄せてくれた。

「守護竜様あ！ よくぞご帰還くださいました！」

「控えよアンルフィア、無礼だぞ」

「というかこの人の暴走止めて下さい隊長殿ー！！」

煩い…失礼、賑やかな人たちだなあ。

一番最初に走りこんできたのが、白い、けれど華やかなローブを着た茶髪の女の子、その次に女の子の人を追いかけてきたのが鎧を着たそこそこ年齢の高そうな男の人、鎧の人とほとんど同時に来たのが、まだ若い黒髪の男の人。

『ええと…』

戸惑う私とは違い、父様は慣れているのか落ち着いた声色で言った。

「王都の防衛、御苦労であった」

三人が父様の前にひざをつく。真ん中の鎧の人が父様に答えた。
「いえ。我らの力が及ばず守護竜様のお手を煩わせてしまったことをお許しください」

「普段ならあの程度の魔獣、何とでもできたんですけれども…魔族どもは流石にどうにもなりませんでしたわ」

女の人がそう続けると、鎧の人が若い人に視線で合図を送った。

「守護竜様にはお初に御目文字仕ります。私は王の侍従をしております、ユスヴェルと申します。王は今だ外にて魔獣討伐の指揮を執っておりますので、取り急ぎ私が王の言葉を伝えに参りました」

「聞こう」

ユスヴェルというらしい若い人は、それを受けて再び口を開いた。
「申し訳ない。残存の魔獣どもを仕留め次第急ぎ戻る故に、姫共々今しばらくお待ちいただきたい、とのお言葉でした。その間のことは神殿に任せてございます」

「…姫？」

私と父様の声が重なった。

ところで、さっきから女の人がきらきらした目でこちらを見てくるんですが…。

「お嬢様を伴って参られるとの報告を受け取っております！。そちらの方がお嬢様でいらっしやいますか？」

女の人がにこりと笑った。

「王に先駆けてではありませんが、自己紹介をお許しただけですか？」

どうすればいいのか戸惑っていると、父様がしつぽで軽く背を押してきた。押されるがままに一步前に出ると、女の人が深く頭を下げた。

「私は、王立魔術師団所属、風の魔術師団第二小隊長を勤めさせていただいております、アンルフィア・ラークと申します」

「僕はラウル・リディアード。王立騎士団第三中隊を任されております」

「先に申し上げたとおり、王の侍従を勤めております、ユスウエル・デーンと申します」

緊張するというか恥ずかしいです本気で。しかしまあ、名乗られた以上名乗り返すのが礼儀だ。私は前みたいに嘸まないように、慎重に人間の言葉を喋りだした。

「私は、銀竜アルフエンストラウドの娘リステイアージェ。ええと…よろしく願います？」

人間の礼儀なんて知らないのです、これが精一杯。

女の人がぼつりと「可愛い…！」って言ったのが聞こえたけれども、可愛くないもの！ 少なくとも多分私貴女より年上だよ！ 年上に可愛いは変だよ！

こんな感じで、私の人間社会での生活は始まったのだった。やれやれ、我ながら先が思いやられるよ…。

6 王都の空の半竜娘（後書き）

少々短めになりますが、キリがいいのでここで一旦区切らせて頂きます。

評価等々、いつも励みにさせて頂いています。今後ともよろしく
お願いします！

7 王子様と半竜娘（前書き）

章分けをしてみました。

7 王子様と半竜娘

さて。ここでちょっと服について語ってみよう。日光や寒さ、風雨や乾燥から人を守るために作られたという服は、いつしかその役割を超えて富や権力を誇示したり、身分や所属組織を図るためのものとしても機能するようになった。「TPOをわきまえた服装」というものは人間には重要だよね。でも、譲れない境界もあると思うんだ。

何が言いたいかというと：現在私は着替えから逃走中です。背中の開いてない服なんて着たくないんだよ！ 私の翼は普段はしまっている。その状態だと普通に人間の背中そのまま、跡も痣もないわけ。それでも竜として、翼が出せない服は絶対拒否だ！ かっていってイブニングドレスみたいに、背中が開いていても裾が長いと踏んで転ぶ自信がある。ちなみに現在の私の服装は、ホルターネックのミニスカワンピースである。母様の服を自分で改造したものだが、動きやすいし楽なので気に入っている。

あの後着替えを勧められたのはいいけれども、用意されていたのは露出の少ない、くるぶしまでの丈のワンピース…というよりシンブルなドレスのような服だった。当然背中が開いていない。用意してくれた女官さんと思しき人に言ってみたものの、結局どうにもならず、これに着替えるくらいなら、と逃亡してみた。

情けないのは承知しているけど、こればかりは譲れないんだ！

神殿の中をふらふら歩いていると、やがて開けた場所に出た。中庭だろうか？ 小さいながらも綺麗に整えられ、小さな四阿あずまやを中心に配した、白い花が咲くその場所は、久々に見る「意図して作られた美しい場所」だった。

「私」が入院していた病院は長期入院をしている人が多かったから、気分を和ませるために病院の敷地内に小さな庭園もあった。そ

れほど多く訪れた場所ではなかったけれども、何となく懐かしい気分になって私は四阿に足を向ける。花を愛でながらゆっくり歩いてもそれほど時間をかけることなくたどり着いたそこには……

「……あ」

先客がいた。しかも見覚えのある顔だ。お互いに一言発して固まった間を、風が優しく吹き抜けていく。このまま立ち去るわけにもいかずに、私は声をかけた。

「背中はどう大丈夫？」

そう。彼は神竜の谷の傍で怪我をしていた人だ。

「おま……貴女はあの時の。守護竜様の娘様でいらつしやいますか？」

「そうだよ。怪我は治った？　あまり大怪我を治したことはなかったから、心配してたんだよ」

「おかげさまで大事には至らずに済みました」

よかったよかった、一応気になってたんだよ。そういえば、あの時は睨まれたかと思っただけど、この人ただ単純に目つきが悪いだけかも。今も、普通にしているとと思うけど若干目が怖い。そうしてやや目をそらしていると、今度は彼が声をかけてきた。

「あの……お迷いになられたのですか？」

しかし……この人はなんでまたこんな変な喋り方をするのか。

「あのね、無理して敬語話さなくてもいいよ。苦手でしょ？」

彼は口を閉ざして視線をふいつと逸らした。凶星かな。

「しかし……」

何か言い募ろうとする彼を遮って、私は言った。

「人間はどうか知らないけど、竜は自ら敬意を払うに値すると認められた相手にしか敬意を表さない。私は竜だよ。あなたが私を、敬意を払うに値する存在だと認めてくれたならそれはそれで嬉しいけど、口先だけの敬意ならいらぬ。あなたが話したいように話せばいいから」

あと、これは言わないけど、今のままだといつ舌を噛むかわかったものじゃない。見ててひやひやするのだ。

彼はしばし考えたり唸ったりしていたのだが、やがて折り合いがついたのか息を吐き出した。

「じゃあ、楽に話させてもらおう。正直敬語って奴はどれだけ習ってもどうにもな」

「敬意を払いたい相手が現れたら、自然に何とかなるんじゃない？」

「そうなるといいんだが。改めて、怪我治してくれてありがとな。普通なら死んでるって言われたよ」

そんなに重傷だったのか。真っ赤で何がなんだかわからなかったから大怪我だとは思ってたけど。

「あー…名前、リステイー？ だっけか」

「リステイアー・ジエだよ。今度間違えたら決闘を申し込むからね」

「それも竜の習慣か？」

「まあ、そんなところだね。名前は大事なんだから、間違えたり略したりは失礼だよ。ついでに、名乗らないのもね」

私はまだ彼の名前を知らないんだよね。

「あ、悪い。俺はアシエン・ジグリッド・リオ・ラスティータという」

「人間は姓があるからどこまで呼べばいいのか…名前はアシエン？

アシエン・ジグリッド？」

「アシエンでいい」

「了解、アシエンだね。…あれ？ ラステイータってこの国の名前じゃなかったっけ？」

聞き流しそうになったけど、これはどうしてだろう？ よくある

ところだと王族だとか、姓がない人は国の名を姓とするとかな？

「あー…まあ、一応親父はこの国の王をやってる」

「王子様ってやつなんだ」

前者だったようだ。まあ、言われれば納得の外見ではある。さらさらした金髪に宝石のような碧眼。目つきは悪いが、涼しげな目元とかクールな眼差しとか言えなくもないしね。

私が黙って観察していたせいか、アシエンは不機嫌そうに顔を逸

らした。

「そうは見えなくて悪かったな」

ぼそりと、まさに吐き捨てるといった感じの言葉に、私は首をか
しげた。

「王子っぽく見えなきゃだめなの？ 見た目だけで決まるなんて、
随分と薄っぺらい王家だね」

「何だと!？」

「王家が忠誠を誓われる対象なら、表面一枚の美醜じゃなくて態度
で示せて言ってるのよ。いくら外見ばかり良くたって、馬鹿ばっ
かりやってるの相手に敬意なんて持てないわ」

前世は王とか皇族に対する敬意なんてとうの昔に忘れ去った日本
人、今は敬意の対象は自分で決める竜の私だ。顔がいいだけの王族
なんてそこの顔だけアイドル程度の存在でしかない。ついでに「
私」はアイドルは嫌いだった。

私は更に言い募る。

「不躰にじろじろ見たのは謝るわ。でも、私は見た目で何かを判断
するようにはしない。地位も身分も関係ない。アシエンが私に
何かを示したいなら、その行動と生き様で見せてよ」

ぽかんとしたアシエンの前に、私はぴつと指を立てた。

「と、というのが私の考え。竜としては一般的な考えだと思うよ」

そう笑ってみせると、つられてアシエンも笑ってくれた。

「変わってるな、お前」

「人間の常識に当てはめれば、変わってるのかもね。私は竜だけど、
外見がこのとおりほとんど人間だから、そう感じるんだと思うよ」

四肢を伸ばしてひらりと回ってみせる。濃い青に阻まれて縦に割
れた瞳孔は目立たない。翼さえ出さなければ、私は容易に人間に紛
れられるだろう。

それでも私は竜で、更に前は人間だったけれども、五十年の歳月
の前にその感覚は大分薄れてきている。その人としての感覚も、こ
ことは異なる世界のものだ。変わっていると感じるのも当然だろう。

「そういうものなのか？」

「そういうものよ」

そして私たちは、また少し笑った。

* * *

「ところで」

ひとしきり笑いあった後で、アシエンが口を開いた。

「どうしてこんな入り口近くにいたんだ？ 迷ったのか？」

「あ、えと、それは…」

着替えから逃げ出してきたことを白状させられて、爆笑するアシエンを叩き倒すまで、もうあと数分。

7 王子様と半竜娘（後書き）

ストックは残り一話あるのですが、少々誤字誤用が増えてきたので校正をやり直します。

今後は2日に1話を目標に投稿していこうと思います。更新が遅くなりますが、ご了承ください。ある程度ストックが溜まりましたら、また毎日更新にしようと考えております。

8 はじめての外出と半竜娘（前書き）

タイトルに偽りあり、出かける前で一旦切りました。区切りの問題上、今回はちょっと短めです。

訂正前のを載せてしまっていたので、正しいほうに差し替えました。

8 はじめての外出と半竜娘

「悪かった」

「わかればよろしい」

相当痛かったのか、しばらくの間起き上がれなかったアシェン。やっと身を起こして一番の謝罪に、私はとりあえず答えておく。別に怒ったというわけではないんだけどね。

「しかしまあ、その格好は…」

改めて私を見たアシェンは、困ったように目を逸らす。

「何とかしたほうがいいな。ちよっと、その…」

恥ずかしい、なのか、はしたない、と続くのか。目を逸らすということはそういう意味だと予想してみる。がしかし、随分いまさらだなあ。私、最初からこの格好なのに。

「女性としては常識はずれな格好なの？」

「傭兵ならまあ、動きやすさ重視で似たような格好している人もいるが…姫君の格好じゃないぞ」

「姫君って…誰が」

「竜の姫だろ？」

誰だそんな恥ずかしいのを言い出したのは！ そういうえば父様のところに来ていた人間も姫だの何だのと言っていたな…。勘弁してほしいよ、そんな柄じゃないのに。

「姫はやめて欲しいなあ…。それはそれとして、服はなんかこう、背中がふさがっててぞろっと長いしかないって言われたのよ。動きにくい上に翼が出せない服なんて御免よ！」

実際、翼が出せないと飛べないからかなり切実な問題なのである。

「いつそ布もらって自分で作るうかな…」

「作るのか？ 普通買うだろ！？」

「だって私、人間のお金持ってないもの」

本当は布を買うのにもお金が要るだろうし、アレンジヤリフォー

ムではなくただの布から服を作るのは初めてだから自信はないけど。

「布とー、糸とー…針は借りられないかなあ…？」

「だからちよつと…」

「あ」

布の切り方を考えていた私だったが、一つの気配を感じてぱつと顔を上げて辺りを見回した。

「どうかしたのか？」

「父様の気配が近づいてきてる」

通路はどう考えても通れるサイズではないため、空かと思い上を見上げる…が、それらしき影はない。父様の気配を間違えることなんてないから、近くにいると思うんだけど…

「リスティアージェ！」

「えっ!？」

通路を通って走ってきた人が、私を呼びながら中庭に飛び込んできた。

金色の瞳、一房金髪の混じった銀の髪。簡素な服に身を包んだ男性なんだけど…何故その人から父様の気配!？

「よかった、姿が見えなくなったと聞いて心配したよ」

「父様、なの…？」

気配は間違いなく父様のものなのだが、いかんせん外見が違いすぎる。

「ああ、変身魔法というものだよ。この姿は窮屈なのだが、人の建物の中を移動するときはこの方が都合がいいからね。リスティアージェが翼をしまっているのと同じ魔法だよ」

「翼…私無意識でしまってたよ」

「ふむ…それなりに難しい魔法なのだが、無意識とは。流石はリスティアージェだ」

まあ確かに、無意識とか反射とかで魔法を発動させちゃうことはあるけどね。ただあれはどちらかというと未熟者の証明みたいなものだから、褒められるものではないと思うんだけど。

「ところで、部屋からいなくなつたと女官が騒いでいたのだが…」
父様の目が鋭く細められ、アシエンを捉える。

「あ、あのね！ 服がね…」

流石にとぼつちりを食わせるわけにはいかない。恥ずかしながら
も手早く事情を説明すると、父様は唸つて考え込んだ。

「ふむ、人は服装に何らかの規則があるとは聞いていたが、難しい
ものだな」

「私としては、翼が出せない服はちよつと不安なの」

「なるほど。しかし人間の服か…」

「あの…」

と、これまで口を閉ざしていたアシエンが口を開いた。

「俺…じゃなくて私が、城下の服屋まで案内しましょうか？」

父様が再びふむ、と唸る。が、お金がない以上どうしろというの
だろうか？

「何度も言うけど、お金持ってないのよ」

「かね、というのはこれのことか？」

前触れなく父様が差し出した手の中には、金色の貨幣らしきもの
が数枚。それを目にした何故かアシエンが目を見開いたが、私は気
にせずその手の中の金貨を眺める。

「以前セリセラがこれと物を交換していたのだが、違つたのか？」

「い、いえ…問題ありません」

なるほど、これがこの世界のお金か。

「では、少し城下へ行くとするか」

話をつけてくる、と言つて父様は再び建物の中へ。あつけに取ら
れるアシエンを横に、私は弾む心のままにここにこしていた。

こうして、私たちは城下町へ買い物へ行くこととなった。わーい、
父様とお出かけだー！

ちなみに父様の出した金貨はこの世界の最高額貨幣で、これが二、

三枚で一家族が一ヶ月食べていけるくらいの価値があるものだったらしい。

8 はじめての外出と半竜娘（後書き）

お気に入りに入れてくださった方、感想くださった方、そして読んでくださる全ての方々へ、本当にありがとうございます。

誤字報告等、本当にありがとうございます。

今回出てきた金貨は、大体一枚一万円くらいとしております。物は全体的に日本より安いですが、ラストイーダ国は基本常に魔獣と戦っており、農耕地が少ないため、武器防具と食品を中心として若干高めの物価となっております。

貨幣は5段階、小銅貨、銅貨、小銀貨、銀貨、金貨とあり、それぞれ一円、十円、百円、千円、一万円くらいの価値です。

9 鍵と記憶と半竜娘（前書き）

説明と謎しかない回となっております。

投稿が遅れた理由については、あとがきにて。

9 鍵と記憶と半竜娘

「うわぁ……！」

町に出てから、私の口から出るのはこんな言葉ばかりだった。レング造りの家、石畳の道、そこを歩く沢山の人々。見るもの全てが新鮮。それでもどこか懐かしさのようなものを感じるのは、前の「私」が見たものとどこか共通する部分があるからだろうか？

ただ、行き交う人々の中には見慣れない外見をもつ者たちも混じっていた。

細身で背の高い、髪の中から長く尖った耳が飛び出している人たち。動物の耳と尾を持つ人たち。がっしりした体格の背の低い人たち。背が高くがっしりした、何故か皆髪型がポニーテールな人たち。個性豊かな人たちに目を白黒させていたら、どうやら足が止まっていたらしい。手を繋いだ父様が笑って説明をしてくれた。

「リステイアージエ、彼らは皆『人』と呼ばれる種族に属するものたちだよ。

人には五つの種がいる。一つ目は、魔法に優れ精霊と生きる、『森の人』とも呼ばれるエルフ族。長い耳としなやかな体躯が特徴だ。二つ目は、俊敏さと感覚に優れる、『草原の人』とも呼ばれる獣人族。獣の耳と尾を持つのが特徴だ。

三つ目は、頑強な体と器用な指を持つ、『山の人』とも呼ばれるドワーフ族。背は低いががっしりとした体つきをしている。

四つ目は、勇猛さに優れ情に厚い、『荒野の人』とも呼ばれるケントウルス族。彼らの伝統である『馬の尾』と呼ばれる髪型と高い背が特徴で、町の外ならば常に傍らに馬がいるはずだ。

最後に、確たる特徴を持たぬが故に、あらゆるものに勝る可能性を秘めた、『平原の人』とも呼ばれる人間族。人の中で最も数が多く、多種多様さこそが特徴とも言える」

エルフに獣人、ドワーフまではそこまで違和感がなかったが、ケ

ンタウルスって……見た目背が高いだけの人なんだけど。イメージ的には、人間の上半身に馬の下半身って感じだったから、何となく違和感がある。

「ケンタウルスの人の、馬って？」

まさか前の「私」の持つイメージをそのまま伝えるわけにもいかず、何とでも取れるような曖昧な言い方になってしまったが、とにかく父様に聞いてみる。

「ケンタウルス族は、生まれた時から荒地馬エーデホースという種の馬と共にあるという。常に傍らにいるその馬は、彼らにとってはもう一人の自分とも言える存在らしい。『人馬一体』と謳われるように、彼らは馬に跨り戦うときにこそ最大の強さを発揮する。とはいえ、荒地馬エーデホースは他の馬より大きいから、町の中に連れて入るのは難しいんだ」

「なるほどー。でもその馬と離れるのって、ケンタウルスの人たちは嫌じゃないのかな？」

「嫌だろうね。だから彼らは町の中にいることは少ない。夜に宿で泊まるのを避け、野宿するのが普通とも聞くよ」

ふむふむ、馬と人の共生関係にある種族というわけか。なんだか初めて、「私」の常識とは違うという意味で異世界らしいものに出会えた気もする。

「これら五つの種族は全て、二本の足で歩行し、自由に動かせる二本の手を持ち、言葉を解する。これが人と呼ばれるものの定義となるよ」

なるほど。この定義に従うなら、私は完全に人の部類に入るんだなあ……。

* * *

そんなことを言っている間に、服屋の集まる場所に着いていた。

一応女の子の着替えということもあって、父様とアシエンは店の外にいる。私はそのあたりあまり気にしないけれども、アシエンは言わずもがな、父様も「セリセラ曰く、女性が着替える時は、身内であつてもそれを見てはいけない」とのこと。

私？ 昔は物心ついたころから日々診察当たり前、しかも心臓に病気があつた身だよ？ 心音・心電図・心エコー等検査の数々。上半身を人目に晒すのを恥ずかしがるような可愛さなんて最初からないんだよね。まあ、それなり程度に常識はわかまえてるつもりだけ。

靴まで一式買って着替えていくつもりだから、店もあちこち回っている。あれやこれやと手に取り体に当て、としていると……唐突に、私の耳に途切れ途切れの声が聞こえてきた。

「……王家……瘡……弱い……鍵……」

「……でも……覚悟……」

父様と、アシエンの声。もちろん、本当は聞こえるはずのない距離だ。それでも聞こえてきたということは……

『こら、精霊さんたち！』

しやらしやらと、葉ずれのような音が連続する。案の定、風の精霊さんたちの悪戯だった。

精霊さんたちは、好意を抱く対象には進んで力を貸してくれるし、危険から守ってくれたりもするんだけど、基本的に皆悪戯好きだ。

世界には全部で六種類の精霊さんがいる。私は一応全種類の精霊さんと面識があるが、親しいのは光の精霊さんと風の精霊さん、次いで水の精霊さんだ。地の精霊さんもそれなりに親しいかな？ 火の精霊さんと闇の精霊さんは、会ったことがある程度だ。

精霊語は喋れるし、精霊さんたちをお願いして精霊魔法を使うこともできるけれど、『精霊の加護』はないから精霊さんの言っていることはわからない。『精霊の加護』は……一人の精霊さんにベタ惚れされてるような感じ、と言えばいいのかな？ ちなみに父様はイルミナという光の精霊さんの加護を受けている。父様曰く、イル

ミナさんだけは意思疎通ができるらしい。

それで、この遠くの声が聞こえるという現象は、大体風の精霊さんの悪戯なのだ。精霊さんたちに一言言ったら二人の声が聞こえなくなっただけだから間違いない。

その中で、私は一つの単語が頭に引っかかっていた。

(鍵、ねえ……)

鍵。錠前を開けて閉めるもの。図案としても用いられるし、暗号解読に使う鍵っていうのもあるけど、まあそれは置いておいて。

(どこかで聞いたことがある気がするんだよねー。鍵、鍵……)

そう、私はどこかで聞いた。何か特別な意味を持って、『鍵』という言葉聞いたのだ。

それはとても大事なことで……

どこかで、かちりと音がした。それは風の精霊の悪戯ではなくて、それどころか物理的な音ですらない。何かが頭の中でかみ合った、そんな感じだった。

「 暁拒む黎明訪れし時 風の門、黒の扉を閉ざす鍵となれ 」
言葉が零れ落ちた。言ったのは私。でも、それは意識した言葉ではない。そして……それは、この世界では誰も知らない言葉、日本語。

私は、一つだけ思い出した。

『私がここにいるのには理由がある。けれども今はその理由を忘れてる』ということ、思い出した。

9 鍵と記憶と半竜娘（後書き）

閲覧ありがとうございました。

さて、本来なら九日に投稿予定でしたが遅れてしまいました、すみません。活動報告にも書いたのですが、風邪を引いてしまいました。現在は熱も下がり、若干のどの辺りの扁桃腺に違和感がある程度なので、もう大丈夫だと思います。ご心配お掛けしました。

季節の変わり目ですので、皆様も体調には十分お気をつけ下さい。

10 夕暮れの半竜娘（前書き）

0時には遅れました。

10 夕暮れの半竜娘

『忘れてる』ということを出し出す、というのも変な表現だと思っけど、それ以外にいい言葉が見つからなかった。

実のところ、私にはこの世界に来た瞬間の記憶はない。もしかしたら、卵の中で意識が目覚めた瞬間にこちらへ来たのかもしれないけれど……何とこの世界に来るきっかけ、どのような部分がかかるつきり抜け落ちているのだ。私の感覚としては、向こうで「私」の意識が切れる。多分このあたりで「私」は死んだと思っけど、なんか眠った感覚に近かった気もする。で、起きたら殻の中。寝て起きる、その間の記憶がないのだ。

多分、何かはあったんだと思う。よくよく思い出せば、眠った、もとい死んだ瞬間に声が聞こえた気もするし。ただ、その声が何て言っただかは全く思い出せない。

もどかしい、すっきりしない気分のまま、手に持った服に目を落とした。こんな状態でも半分無意識に服を選んでいた自分に、少しだけおかしい気分になる。持っているのは全部私の好きな淡い青や紫を基調とした服で、おかしい気分を通り越して笑いがこみ上げてきた。

(まあ、いいか)

今考え込んでみても答えが出ないなら、悩んだところで仕方がない。必要ならいつか思い出さるうからな。

気に入った服たちを手に取り、店の人に声をかける。着替える場所を貸してもらえる店だといんだけど。

「どうかな？」

早速新しい服に着替えて、父様たちの元へと戻る。色は完全に私の趣味、形は半分実用性で選んだけれども、まあ無難には仕上がっていると思う。

現在の私の格好は、薄紫のホルターネックのワンピース。丈は膝下まであるけど、フレアスカートになってるからそこまで鬱陶しくはない。若干足に絡みつく感じはするけど、慣れれば平気だと思う。腰には革のベルト。簡単な剣帯の機能も備えているが、その割には細身で色もおとなしい。その上に、白の大判ストールをケープみたいに巻いて、足はヒールの低い黒の編み上げサンダル。

髪型とかにも気を使ったほうがいいのかもしいけど、髪飾りとかはまた少し離れた場所に店があるみたいだから、今は気にしない。ちなみに私の髪型はロングに近いセミロングで、形としては長めのウルフカットに近い髪型だ。自分で適当に切っているから、見苦しくない程度に不ぞろいになってしまっただけなんだけどね。

父様たちの前で、くるりと回ってみせる。意外と裾が大きく広がるなあ……。あまり回らないようにしよう、うん。

「似合っているよ、リステイアージエ」

「ありがとう、父様！」

わーい、褒められたー！

なかなか反応してくれないアシエンに、私は改めて問う。

「ねえ、アシエン、どう？ この格好は人の目から見ても非常識？」

人の服屋で普通に買った服だから大丈夫だとは思っけど、私としてはその辺りも結構気になる。

「え……ああ、大丈夫だ、別に変じゃない」

「本当？ よかったあ」

これで変といわれたら、どうしようかと思ったよ。

「さて、これからどうする？ あ、違った。ええと……どういたしましょっ？」

父様がいるからか、必死の敬語もどきで喋るアシエン。凄く難しい顔をしているのがおかしくて、私はつい笑った。

「アシエン、好きに喋ればいいって!」

「しかし」

何かを返される前に、私は空を見て言葉を続ける。

「もう日も暮れてきたし、そろそろ戻ったほうがいいかな?」

「そうだね。そろそろ帰ろうか」

父様がそう言って立ち上がったのを機に、私たちは動き出す。

「長々と付き合ってくれてありがとうね、アシエン」

「あ、いや。俺から言い出したことだしな」

「うん、やっぱりその言葉遣いのほうが、私は好きだな」

私は笑う。王子というには乱暴すぎるかもしれないけれども、その言葉遣いは私には心地よく聞こえる。媚びるでもなく、謙^{へりくだ}るでもない、飾らない言葉。

一瞬、アシエンの足が止まった。

「アシエン?」

「なんでもない!」

そのままスタスタと歩いていくアシエン。その足取りはさっきより速い。

何だろっ、変なの。

歩くこと十数分。神殿に近づくにつれ、服飾や武器防具の店は減っていく。城と神殿を結ぶ大きな道がメインストリートみたいだけど、城に近いほうは戦う人向け、神殿に近い方は戦わない人向けの店が多い感じだ。

神殿に近づくにつれて静かで落ち着いた雰囲気になっていった空気が、神殿に入ったとたん変わった。ピンと張り詰めた、緊迫した空気。大きな発作を起こしたときの病室の中みたいな雰囲気だと思っ

った。

不穏な気配を感じたのは私だけではなかった。父様が目を顰め、アシエンはとつさに廊下にいた人を呼び止めた。

「どうした、何があった!？」

呼び止められた男は、アシエンを知っていたようだ。緊迫した表情の中に、一瞬だけ安堵が混じるのが見えた。

「ああ、アシエン王子! どうか急ぎ城へ。王とデイン王子が……ッ!」

みなまで聞かず、アシエンはすぐに走り出す。私は何が起こっているのかわからず、ただアシエンとその男の間で視線をさまよわせた。

『……わかった、ありがとう』

「父様？」

精霊語で何かと会話していた父様が、ぼつりと言った。

「魔獣との戦いで、王と第二王子が負傷したそうだ」

10 夕暮れの半竜娘（後書き）

閲覧ありがとうございます。

誤字脱字、文章のミス等々、いつもご指摘ありがとうございます。

来週ですが、仕事の都合上更新速度がかなり落ちます。一話か二話投稿するのが限界だと思います。時期的に忙しい為、しばらくの間更新が滞りがちになるかと思いますが、よろしくご理解お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2249w/>

半竜娘は異界の空に

2011年9月26日03時13分発行